

2020年2月8日(土)

TALK 仙台の表現する場を哲学する ―この町の哲学者との対話―

文字起こし：佐立りこ・さくまいずみ (SARP | 仙台アーティストランプレイス)

佐立・・・今日はありがとうございます。野家さんのお話に移る前に、仙台アーティストランプレイス（以下、SARP）という場所について皆さんご存じない方もいらっしゃるかもしれませんので、説明させていただきます。このSARPは、2010年の8月から始まりました。もうすぐ10年を迎えようとしております。

アーティストランというのは、作家が運営するギャラリーの形態です。誰か代表者がいたり、オーナーがいるというのではなく、作家が一週間以上借りて、その借りるお金を払うということで、運営を続けて行くという形です。もともと、この場所に1975年から続いていた老舗の「ギャラリー青城」が閉めるということからはじまりました。SARPはスペースAとBに分かれています。仙台ではこのくらいの展示のスペースはとても貴重で、大きいところだと「県民ギャラリー」、「せんだいメディアテーク（以下、メディアテーク）」になるんですが、個人で借りるには、お金も高くして広すぎるといふこともあり、当時あったその他のギャラリーだと、立体作品をなど置くにはちょっと狭いということもあって、この場所が無くなってしまふのは作家にとっては大変だということになりまして、美術家の青野文昭さんが中心となって作家に声をかけて、アーティストランという仕組みで、まずやってみようということではじまりました。そのときに、ギャラリーを閉めるとおっしゃっていた、「ギャラリー青城」の高橋さんが、そういうことであればお手伝いしましょうと、家賃などの負担をしていただけることとなり今に至っています。

「ギャラリー青城」が閉めるという判断をした状況からもわかるように、仙台では昔から、ギャラリーの経営というものが大変難しいものです。それは今でも変わらなくて、SARPも運営委員会があるんですけども、基本的に決めるのは総会で全員で決めるということになっていまして、毎年来年度も続けるかということをお話しして、来年は無理じゃないか、来年は無理じゃないか、というところでここまで続いてきています。いろいろ要因はあるんですけども、そのひとつの要因として、美術を見て歩く人が少ないということと、それによって、展示をしても無駄だという気持ちもあるのか展示をする人も少なくなっていること、東京にも行きやすいので、東京の方に見に行ったり、東京でやるということもありまして、なかなか難しいのかなと思っております。

10年近くSARPはどうしたら良い方向に向かうのかということをお考え続けてきたのですが、今回トークという企画をたてる機会をいただいたので、SARPだけではなくもう少しひろげて、仙台に住む方や、関わり合っている方たちは、この街での表現活動についてどう考えていらっしゃるか伺いたいと考え、そうしたお話を伺うのは哲学者が適任だと考えました。そこで、仙台で生まれて、今現在お住まいである哲学者の野家啓一さんと、お手紙のような対話形式でお話できたらと思ひ、このようになりました。

野家・・・野家です。去年まで東北大に勤めておりましたが、定年で退職して、一応名誉教授、名誉教授といふば聞こえは良いのですが、要するにフリーターということなんです。今日は佐立さんからお誘いを受けて、こういうトークという場を設けて頂きましたけれども、私が一方的にお話しするのではなくむしろ皆さんからいろいろ

ろ質問を書いて頂きましたので、それをもとにして、できるだけ対話というか、皆さんにも発言をしていただく中で、一方的なトークでなくて双方向のダイアログになればありがたいと思っています。

それで、色別に質問がわけられているようで、緑はみるだけでなく実際に作家、制作したことがある方々で、この中にはちょっと僕が答えられない問題もありますので、そこは佐立さんにお手伝い頂きたいと思いますが、まず、「仙台の表現の場を哲学する」となっているんですが、今日のテーマですね、仙台の表現活動、仙台の表現の場というのは、何を求めているのかわからないという質問があったのですが、これは私が言ったテーマではないので、佐立さんの方から説明していただいた方がいいのかなと思います。

佐立・・・先に説明したとおり、私自身が、ギャラリーがなぜ仙台でなかなか大変なのかなというところから、仙台というのはどういうふうな表現ができるところなのかなと思って、この題名をつけました。皆さんそれぞれ思っていることとか、考えていることが違うと思うので、それに対してどう思うかというのは、限定ではなくて、どんなものかなと思ってつけました。わかりづらかったらすみません。

野家・・・緑（の紙）の方は美術に参加制作したことがあるようですから、僕よりは詳しいと思いますので、あとまわしにしてですね、ピンクのカードを出していただいた方は、美術に参加制作したことがない方で、黄色の方は、そういうことに全く興味が無い方ということで、この方はこの前メディアテークであったラウンドテーブルに参加いただいた方というふうに聞いております。「今話題になっている、美術館、音楽ホール県民会館をどうとらえるべきか、建築物、ハードとソフトの対応、市民県民、来県者などの主張のとらえかた、そういうことについて哲学という立場からのアプローチとはどういうことだろうか」という質問ですね。まあ、美術館や県民会館の問題は、マスコミでも取り上げられていますし、いろんなそれに対する活動、そこにも今ポスターが貼ってありますけれども、最後に紹介させていただきたいと思います。

その哲学という立場からどうアプローチするのかっていうことですが、私に関わっている東北大の教員を中心とするグループの中でのアプローチの仕方っていうのは、合意形成というか、どういうふうに社会の中で、もちろんいろいろ対立する意見があるわけですね。それをどういうふうの一つの方向へまとめていけるか、もちろん対立や議論はあっていいし、ないとおかしいのですけれども、ただそこに、一定のルールが無いと困るというか、だから、前に私の同僚達と宮城県に要望書を出したのですが、やはり今まで進んでいた現地改修、まあ老朽化していることは美術館事実ですので、40年ぐらいたって、ただ、現地で増築をして改修するという方向が一旦教育委員会中心にだされていたのに、急に宮城野原の仙台医療センター跡地に移転新築という案がだされたんですね。そのところが、合意形成のルールというところからすると、少し飛躍しすぎている、唐突でありすぎるので、しかもそのところに説明がない、行政の側ならばこういう理由で方針を変えましたと説明があつてしかるべきだと、説明が無いままに新築移転ばかりが先走りすぎている、そのところに疑問をもっていたので、県の方に要望書を出したということです。

ですから、哲学の立場から今回の移転問題を捉えたとすれば、合意っていうのはどういうふうに形成されるべきか、それから公共、美術館は公共建築物ですから、その公共っていうのはどういうことかということ、そういうことを少し考えてみるのが、哲学、あるいは合意形成のルールということになると、少しいかめしい言葉になりますが、どういうのが、正しいルール、正義にかなったルールになるのか、そういうことを考え

るのが哲学だというふうに自分自身は考えています。この問題についてはまた後で議論する時間があるかと思
います。

それで、実際に制作に携わっておられない方の、質問から入ります。それから全部質問にお答えできるかわ
かりませんので、あらかじめお詫びを申し上げておきますが、少し一般的なご質問から。それから、さっき言
ったように、なるべく皆さんと対話したいので、どうぞ疑問の点とか、もっと聞きたいとか、あるいはここは
どうなっているのだということとかあれば、手をあげてください。その方が僕の方もやりやすいので。

えーと「栄えるとは、繁盛するとは、儲かるとは、利益をあげるとは、・・・上昇することの究極はどこに、
何に至るのでしょうか。人間の一生はたかだか80年」まあ最近では人生100年といわれていますが、だいた
いばけないでまともにいられるのは80年ぐらいでしょうかね、私も近づいていますけれども。「たかだか8
0年程度のはずなのに、どこに向かっているのでしょうか」という質問ですけれども、うーん、これは難しい
ですね。これは究極の問題ですが、要するに栄える、繁盛する、儲かる、利益を上げるという最終的な目標は
たぶんお金ってということになるでしょうね。お金を手元に残すということになるのでしょうか、ただ、そこで
終わりじゃないですね。そのたまったお金、貯金したお金を使って、何をするかってということが問題だろうと
思います。あるいは、お金を儲けただけで幸せで、布団にお金を置いてそこで往生できればいいという方もい
らっしゃるかもしれませんね。永井荷風なんて作家は晩年そうでしたけれども。ただ、普通は、お金を儲ける
そのことが目標ではなくて、儲けたお金で別な目標、立派なお家をたてるとか、海外旅行をしたいとかですね、
そういうところに人生の意義を見出しているわけですね。だからそれを少し難しい言葉で言うと“自己実現”
という言葉になります。

自己実現というのは要するに自分なりの目標、これはそれぞれの人によって違うわけです。例えば美術家と
して名をなしたいという人もいるでしょうし、あるいは社長になって多くの人に命令したいという人もいるで
しょうし、あるいはどこか山の中に小屋を建てて自然と親しんで住みたいという人もいるでしょうし、それぞ
れ自己実現の目標というのは違っていると思いますが、やっぱりそこには自分が実現しようとするある理想で
すね、それと今の自分の現実その間には当然ギャップがあるわけです。要するに、ギャップがなければ何も求
めることがないし、あるいはお金を儲けようとも思わないでしょうから、理想と現実ギャップがあるから、
できるだけ一歩でも理想に近づけようと思ってお金儲けをしたりですね、いろいろするわけですね。最終的な
人間の一生に目標があるとすればそれは自己実現、というか自分の目標を達成する、つまり理想の自分に近づ
くということだろうと思います。そのために、お金儲けをしたりですね、あるいは友達でグループを作ったり、
いろんなことをやっているわけで、最終的にどこに向かっているかといえば、自己実現に向かっている。だか
ら、死ぬ間際に自分は自分が目標とした理想に100%ではないけれども、一歩でも二歩でも近づけたという、
思いに至れば安心して立命できるといふか、死んでいけるということだろうと思います。ただこれは自己実現
の目標そのものは人によって違いますから、それによって手段も違うと思います。だから、自己実現のため
にうんと金がかかるということならば、その前に、金儲けをしないといけなんでしょうし、あるいは、山の中
に一軒家建てて自然と親しんで一生を終わりたいという人ならばあまり金はかからないでしょうから。でも今は
家建てるのは、小屋を建てるのもかなりかかるのかもしれませんが・・・。

自己実現の目標によって違ってくるというか、それに一歩でも近づくことが80年の、短いか長いかわかり

ませんが、自分の人生っていうものをたぶん生きるということだろうと思います。

それから、「自己主張すること、全ての生き物は己の存在を主張する」そうですね。犬でも猫でも、犬は自分の小便を電信柱にかけて自分のテリトリーを拵げようとするわけですけども、「これは果てしが無い」それはそうです。「一人一人すべてのものたちが主張し始めたら騒がしくて仕方がなくなる。」ええ。これもそうですね。「いかがいたしましょうか？」と聞かれてもちょっと困っちゃうんだけど、ホッブズっていう哲学者が昔、17世紀のイギリスにおりまして、彼が人間っていうのは、最初は「自然状態」にあると、自然状態っていうのは、行き着くところまでいくと、「万人の万人に対する戦い」、最後は戦争でしょうね、つまり万人の万人に対する戦いっていうのは自己主張だけして、自分のことだけ考え、他人に譲るって事がなければ、喧嘩、闘争、戦争にならざるをえない、そこで、ホッブズが考えたことは、万人が属する共同体というか、そこに全部自分の武器は預けると、個人が武器を使っちゃいけないと、ですから、武器を全部、今で言えば政府、政府の下にある警察ってことになりますね、そういうところに武器を全部預けて、社会の秩序というものをもういっぺん組み立てましょうということを行ったんですね。それが今の、近代以降の民主的な政治形態の出発点になったと言われているんですけども。

つまり自然状態というのは、ルールが無い状態です。そして、われわれが文化とか文明と呼んでいるのは、いわばそこにルールが出来て、社会の秩序ができていて、それではじめて安心して暮らせるようになるわけですね。だから、暴力というものを自分は使わないで、それは軍隊なり警察なりにまず預けると、その上で社会の秩序、ルール作りを進めましょうというのが近代の政治の出発点といわれているんですけども。その意味では、いかがいたしましょうといわれても困りますが・・・自己主張することそれ自体は悪くはありませんし、すべきですね。ただ、自己主張は誰に向かってするかというと、他人ですね。他者に向かってするわけですね。他者も当然自己主張する権利は持っていますから、そこで、ぶつかれば当然暴力、はては喧嘩、戦争にまで至るわけですね。そこに至る前にもういっぺん暴力、武器というものは一カ所に集めて使わないようにする、その上で人間が共同で、他者というものを前提にして生きていくためにはどうすればいいかということ、社会のルール作り、それは具体的には法律を設けたり、あるいは道徳をみんなで合意したりということになりますが、そういったことを少しずつ積み重ねていく中で、社会の秩序、ルールというものができて、そこで安全に自己主張すると、最後殺し合いにならないように、そういうことができてきたというのがこれまでの歴史なんだろうと思います。だから、最近は民主主義の危機とか、民主主義も単なる多数決の形骸化したものに成りつつあるといわれていますが、もういっぺんそういう意味では我々は社会の基本的なルール作り、どうあるべきかっていうことを考えるべき時代に、トランプみたいな人が、アメリカの大統領になる時代ですから、そこにきているのではないかと思います。

それから、これはちょっとむずかしいなあ。「芸術表現に内在する価値の固有性のようなものを有用性や効率性を市場の価値としている一部の人々にもわかってもらうには、どうすればよいと思いますか？あるいは表現に少しでも近づいてもらえるように表現者側ができることは何だと思いますか。もう少し抽象して、わかりにくい価値あるいは万人に認識されづらい意味をどのようにして、伝えていくべきか、というより、どのように開かれたものにしていけばよいのか。」これはたぶんそれは表現に携わっておられる方皆さんが悩んでおら

れるし、SARPの活動もまさにそのようなことをめざして行われているのだと思いますね。有用性や効率性に還元できない価値っていうものを、他の人にもわかってもらうため、いろんな活動を続けているんだと思いますが、確かにあと、こちらの方、質問いただいた「仙台にはどうしてギャラリーが少ないのか」とか、そういう具体的な問題がでていきますので、それはまた後で、佐立さんあたりを含めてご意見をいただければと思うのですが。

価値っていうのは、なんか抽象的でわかりにくいのですが、簡単に言えば、優先順位のことですね。だから皆さんが今日ここに、集まってこられたのも、天気がいいから本当ならどこかに温泉にでも行きたかったとか、いろんな選択肢があったかと思いますが、そんな中でここに集まっていたというのは、このトークの場が、皆さんにとって多少なりとも価値があるというか、優先順位が高かったから、温泉にもいかないで、あるいは、映画も観に行かないで、せっかくの土曜日なのですね、来て下さったのだと思うのですけれども、わからない価値っていうのは、大多数の人にとっては優先順位が低いものなわけですね。美術館に行って美術を鑑賞したりということは、それよりは、どこかに行って温泉で一風呂浴びた方がいいということになれば当然そっちを選ぶわけですから。ですから、どうやってわからない価値をわかってもらうにはどうしたらいいかというのは、どうやって優先順位を組み替えることができるかという間に置き換えることが出来ると思います。

だから価値というと抽象的だけでも、もうちょっと自分の毎日の生活に則して、当然皆さんは優先順位を決めて、今日は先ずリビングの掃除をしようとか、いや、リビングよりもトイレが汚れていたからそっちの掃除をしようとか、掃除をするにもいろいろな優先順位があるわけですね。だからそれをもうちょっと広げて、この社会の中で、どういうのが自分の自己実現につながっていくかと考えたときに、美術の鑑賞も悪くないとか、あるいは最近評判になっている映画を観に行こうとかするわけですから、その優先順位を組み替えていききっかけをどっかに求めるとというのが、この、わかってもらう、価値をみとめてもらうということだと思います。

だからそのためにこのSARPの活動とか、いろんな催し物もありますし、そういう中で自分がこれのほうが優先順位が高いと思ったら、やっぱりそこに自分で参加するということが大事だと思います。単に考えたり本を読んだりすることにとどまらずに、実際にその場所に行って、そういう優先順位をもうちょっとあげようと思う活動には自ら関わっていくっていうか、そういったことが、急には難しいです。こういったことは徐々に徐々に、そういうことをひろげていくこと、あるいは、ある催し、自分が今まで優先順位が低かったんだけど少し優先順位を上げようという活動には、参加するときには友達とか家族を誘っていくとかですね、そういうことが優先順位をちょっとずつでもあげることに繋がっていくだろうと思います。ただこれは一朝一夕にはできないことですので、本当に一步一步他の方と協力してやっていく、朝起きたら一挙に優先順位が変わっていたとか、価値が上がっていたということは残念ながらないと思いますね。

それから、こっち（緑）の問題意識を持った方の質問に移りますが、何か今までのところで何か質問は、もし皆さんの方から、もっとこのところがわかりにくいとか、つつこんで聞きたいとか、というようなことがあれば・・・。

参加者・・・自己主張っていうのは、アート、美術っていう概念も自己主張という？

野家・・・はい、いいと思います。やっぱりアートっていうか、これはアーティストではないので、佐立さん、後ろにあるのが佐立さんの作品でしたね、それも、自分で制作して、発表するって事はかなり重要な自己主張のひとつだと思います。

参加者・・・それで先ほどのですね、みんなが自己主張しだすと、果てしがなくなるんじゃないかと書いてあったんですけども。でも自己主張はアートだけではないからそれは構いません。重複することはあるんでしょうけれども、自己主張はアートだけとは限りませんから・・・。

野家・・・アートの場合でも、たくさん自己主張したいことがあれば展覧会場満員になるし、河北美術展となれば審査というものがあるわけですね。そこには一定のルールがあるわけで、誰でも彼でも河北美術展に持って行って飾ればいいということにはならない。

参加者・・・関係する言葉で、自己実現とか、自己表現とかという言葉がありますが、先生はその辺の区別はなされていますか？

野家・・・うーんと、そうですね。自己実現というのは僕は一番広い意味で、誰でもが一生追い続けるものと思っていて、その自己実現のひとつとして自己表現というのがあって、アートを制作したり、あるいは、ものを書いたり、新聞に投書したりとそういうことがその下に、自己表現とか、自己主張とか、あるいは、自分でぜひとも訴えたいことがあれば、選挙にたつて演説をするとかそういうことになると思いますが。ただそのすべては、自分の一生かかって成し遂げたいような、あるいは、今の自分と理想の自分のギャップがあって、少しでもそっちに近づけたいっていうことから、いろんなことを始めるわけで。その意味では自己実現の下に、いろいろな表現が入ってくるのではないかと考えているのではないかと考えています。

参加者・・・主張という言葉に非常にとまどいというか抵抗を感じて、自己表現ということの方がナチュラルで、それは対等な関係の中で、自分の今の思考だったり、感情だったり、そういったものを出していくという意味で、私自身は表現という言葉に非常になじみがあるのですが、主張っていうと、なんか権利とか、そういう関係的に対立的な関係で受け止める言葉のように思うのですが、そこはこだわりすぎでしょうか？

野家・・・ええ、そうですね、普通の日本語の感覚だとそう思います。自己主張の方はちょっと出しゃばりすぎて、自己表現の方がもうちょっとソフトっていうか。ただ、やっぱり外国にいくとですね、自己主張を求められます。自己主張しないのはばかだと思われちゃいます。だから日本人なんかは、英語がろくにしゃべれないとだまっていますね。だまって自己主張しないのは、何も求めていない、あるいは、自己主張する能力がない、はっきりいえばちょっとばかだと思われちゃいます。だから、その、日本ではたしかに自己主張の方が出る杭は打たれるっていうふうな社会的な通念があるので、その意味では自己表現の方がナチュラルでソフトだっていうのはその通りだと思います。

参加者…自己実現、自己表現、自己主張という言葉は自己という言葉がつくんですけども、わたしなんかはすごくいい加減に生きているものですから、なんか自己ってつくつくと、そもそもあらわすべき自己があるか、主張すべき何ものかをもっている、そういう人しか使えない言葉のように思っていますね、ちょっとつらくなるんですけども。そういう人達も結構いると思うんです。そういう人間は、自己主張の果てに戦争があるとしたら、戦争がおきないのはそういう人がいるからではないかとすら思うのですが、いかがでしょうか？

野家…大変良いご質問だと思います。つまり自己ってというのは、あるのか、ないのか、どこにあるのか。

参加者…持たなきゃいけないのかという強迫観念にかられるんですね。

野家…それ一番哲学の究極の問題ですね。ただ、自分の持ちものがとられたらやっぱり怒りますよね。それと、小さい頃は兄弟げんかなんかなさって、弟の方に食べ物が、お菓子が多くあるとよこせと言ったり、そういった意味では誰でも自己っていうものは持っているんじゃないのでしょうかね。だから、主張すべき、表現したり、ものにかいたりする自己があるかというのは、まだちょっとそれとは別ですけども、赤ん坊の頃から泣きわめくって言うのは、お腹がすいたとか、おっぱいがほしいとか、やっぱりそれも自己主張ですよ。

参加者…それは生存とか、テリトリーの主張ということと、それと哲学的な意味で言う自己実現とか、自己主張とかちょっとなんかどっか違うものなのかなと。

野家…そうですね。ただ、出発点は生物学的な生存っていうところから、「自己保存」っていう、哲学ではスピノザという哲学者が使った言葉ですが、ラテン語ではコナトゥスという言葉ですが、我々が生きるというところの出発点には自己保存ということがあると。要するに、赤ん坊がお母さんのおっぱいを欲しがったり、自己保存っていうのは、簡単に言えば、生きていくっていうことですよね。それが、次第に、単なる生存ではなくて、アートとか言論とか、そういうところに繋がっていくわけですけども、出発点は、自己保存、自分を保つということ。生物学的な欲求や欲望から始まるわけですけども。

ただ次第にそれが、自己と対立するのが他者です。最初はお母さんとかお父さんとか、自分の家族、兄弟、周りにいる人だったわけですが、幼稚園に入って小学校に入ると、自分とは全く別の生まれ育ち、家庭にいる他者っていうのが、そういう人達と仲良くなることもあるし、喧嘩をすることもある。だから、自己ってものを考える時に、ひとつは自己保存を目的としている生物学的な自分というものと、少し成長してくると他者との関係にある自分というものがでてくると思います。

そして、私が非常に影響を受けた精神医学者で木村敏という先生、まだご存命です、『あいだ』という本を書かれていますけれども、つまり自分がどこにあるかということ、自分の心の中でも頭の中でも DNA の中でもなく、自分と他者の間にあるということ、と木村先生はおっしゃったんですね。自己っていうのは、固定したものではなく、常に他人との付き合いの中、関係の中、他人とのあいだの中にあるというのが木村先生の主張されていることなんです。

僕もまさに、自己っていうのは他者がないと、自己だけであるということはありませんので、常に自己と他者というものがあってはじめて自分っていうものが、つまり自分とは何かというのは、他者の鏡に映して見ることによってあきらかになる。つまり自分の顔に何がついているか、あるいはしわがよってきたか、鏡に映して、皆さん女性のかたは毎日鏡をみていらっしゃると思いますけれども、他人というのも鏡なんです。他人とおしゃべりをしたり、あるいは、いろんなゲームをしたり、そういう他人と付き合い中ではじめて自分というものがわかってくるわけですから、自己っていうのははじめからあるものじゃなくて、他人との関係の中に入れば浮かび上がってくるのが自己で、だから、新しい他人、例えば外国人とかですね、そういったのと直面すると自分がいかに日本的な考えをしてきたか、日本人であったかということが自覚されるのです。それは他人という鏡に自分を映して見ることによって、自分がなんであったかということを今まで気がつかずにいたことが気づかされるという、そういうことだろうと。

だから、先ほど自己を積極的に持ってらっしゃらないと（おっしゃっていただけ）確かに、日本人はだいたいそうですね。ただそれも、日本人は、自己と他者との間でそういう自分というのを作ってきたと言える。だからはじめにかきりした自己というのがどこかに実体的にいて、哲学ではそう言いますが、どこかにDNAとか脳細胞とか、あるいは精神の中に自己っていうのはあるわけではなくて、他人との関係の中、間に自己っていうものがはじめて生成してくる。つまり、はじめから自己は存在している、あたりまえのようにあるわけではなくて、むしろ徐々に子供の頃から大人になる過程で、特に赤ん坊が自分っていうものに気がつくのは、「鏡像段階」という精神医学上の言葉があるんですが、これはジャック・ラカンという、フランスの精神医学者が唱えたことですが、要するに皆さん鏡見られるけれども、赤ん坊のころに初めて鏡をみたときのことは覚えてます？たぶん誰も覚えていないと思いますし、私も覚えていません。だいたい自分が母親の胎内から生まれて、産湯をつかったことなんて覚えてないですよ。ただ、三島由紀夫は自叙伝でちゃんと覚えていると書いてあります。まああいう天才的な人は別として、普通はだいたい二つとか三つになって、はじめて今記憶が残っているって、そのころでしょうね。二つか三つの時の記憶が一番古い記憶かだと思いますけれども。その頃に、鏡像段階っていう、つまり鏡に映った自分を自分だと自覚できる、認識できるそういう段階が、人間の成長段階にはある、そのときにはじめて自分っていうもの、自分っていうのは、自らの分、わけまえですけれども、そういう鏡像段階っていうところを経て初めて、我々は自分っていうものを自覚する、受け入れる、そういう段階を通じて次第に大人になっていくわけです。

ところが、犬とかチンパンジーに鏡を見せると、それが自分の像だということはいわかんないらしいですね。それで鏡をみせると、チンパンジーなんかは、鏡の裏に自分とは違うチンパンジーがいると思って、鏡の裏を盛んにさがすらしいです。犬は、鏡に映っていると、最初はじろじろ鏡をみるらしいけれど、次第に興味を失って来ると、背を向けてしまうと、そういういろんな心理学の実験がある。人間だけがそれを自分の“像”だということを理解する。像っていうことは何かっていうと、他人から見られた自分です。つまり鏡に映っているっていうのは、像であるということを知覚するというのは、それが他人から見られた自分だということですね。それが先ほど言いましたけれども、自分っていうのは他人を鏡としてはじめて自分ができあがるという、その意味では、自分っていうのははじめから赤ん坊として生まれ落ちたときからあるわけではなくて、次第次第に生成する、徐々にできあがっていくものだと、そしてそのひとつのポイントが鏡像段階という二歳とか三歳ころの、それからもうひとつが青年期、ちょうど思春期にあたる、そのときに自分っていうものも

う少しはっきりした形で、それを難しい言葉なんですが、英語でアイデンティティーと、これも普通は“同一性”ですが、自己同一性と訳されています。

やはり精神分析学者でE・H・エリクソンという人が唱えて有名になった、アイデンティティーという言葉はもともとあるかけですけれども、それを思春期の自己確立という意味で使ったのがエリクソンという人です。どういふことかという、自分というの、あるいは自己というの、我々小さい頃からの記憶である一貫性、記憶の一貫性ですね、だんだんぼけてくるとここはどこ、わたしはだれっていう状態になるわけですけれども、我々自己というものをある意味支えているのは記憶の一貫性ですね。昨日の自分、1年前の自分、5年前の自分、そして明日の自分、3年後の自分というふうに、自分の一貫性というものがあると。これは自分で確かめられるわけですね。そして、記憶があやふやになって後期高齢者にわたしも近づいていますが、そういうふうになると、朝飯を食べたかどうかもあやしくなってくると。ただこれだけでは自己確立はできないっていうのがエリクソンのアイデンティティーってことで、他者の眼差し、それから承認、それが合わさってはじめて自己というものができるといふのが、つまり、自分の記憶の一貫性は必要条件だけれども十分条件ではない、つまり他者から自分が認められる、他者の眼差しにさらされて自分がなにものであるかということ、これを他者から認めてもらうそのことが、思春期の自己確立にとって非常に重要なことだといふふうにエリクソンは言っています。それがうまく働かないと、一部分は今よく発達障害といふふうなことが言われていますけれども、ただ、アインシュタインもビル・ゲイツも発達障害だといふふうに使われていますので、必ずしもそれは悪いことではないわけですけれども、普通の成長過程で思春期を通過して大人になるということからすると、その自分の記憶の一貫性と、記憶が一貫していないとだれかから千円借りたのもすぐに忘れてしまうといふ、わたしもしばしば忘れますけれども、そういう記憶の一貫性と、それから他者によって自分が誰であるかということ、これを認めてもらう、それがうまく組み合わせられると、思春期を通過して大人になっていくと。

まあ、あまり大人になると、アーティストにはなれないのかもしれませんが。自己というの、哲学の立場から言うとするとうまく単純ではないといふか、かなりいろいろな説がこれまでも飛び交ってしまっていて、ただその中で共通しているのは、自己というの自分だけでは成り立たない、他者というの、他者の眼差しにさらされてはじめて自己というものがある。そういう意味ではまさに、自己と他者の「間」にこそ自分というものがあると、いふふうな言い方ができるのかなと、思いますけれども。

参加者…自己保存、生命であるとか、安全を保つみたいな、生物体としての自己保存と、それから自己実現とか、自己主張、自己表現みたいなものになってくるとすれば、そこに間にでてくるのは、より良く生きていってという概念かなって思ったんですよ。でも今最後の方の話をお伺いすると、他者との関わりがあってはじめてより良く生きていってという概念がでてくるのか、そもそも人間にはより良く生きていってというものが生まれながらにそなわっているものかわからなくなってきた。

野家…それも難しいですね。最初はやっぱり自己保存、生物学的な、赤ん坊だって苦痛があれば泣きわめくし、その意味では、生物学的な自己保存から出発しながら、今言われたより良く生きていってという意識がでてくるのは、まだ鏡像段階ではそうではなくて、思春期に他者というものと深く関わり合って、自分も他者を承認するわけです。他者を認めるといふか。そのことが大事といふか、その中で、その他者との関わり合いの中

で自分の立ち位置っていうか、社会の中でどこに自分が位置しているのかっていうことがわかってはじめて、次のステップっていうか目標に歩み出すことが出来ると思うので、そういった意味で他者ってものが自分のより良く生きるって意欲にも必須のもの、必要なものといえるのではないかと思います。

(休憩)

野家…それでは再開させていただきます。後半は、いただいた質問の緑（の紙）の芸術活動、制作活動に携わっている方の質問となります。先ほど出して頂いた順番にそってお答えというか、わたしの考えを述べさせていただきますので、もし途中で先ほどと同じように質問とか疑問とかありましたらどうぞ。自己主張のあるかたも構いませんので、手をあげてください。

「他者の言葉、意見やマスコミの情報を自分で分析し、何が本当なのか本質なのかを理解出来る力をつけたい。」これは私もつけたいと思っていますが、まあ今いろんなネット、特に若い方は SNS でも情報が入ってくるし、何しろトランプ大統領になってから、フェイクニュースというような言葉が流行り始めてどれが真実なのかという、よく英語圏では **post-truth**(ポスト・トルトゥース)というのが一時言われたことがあって、ポストってというのが～の後っていう意味ですね。昔は真実がマスコミにせよジャーナリズムにせよ真実っていうことを追い求めていたんでしょうけれども、トランプ大統領以降はむしろ真実っていう言葉にいわばバイアスがかって、価値が下落したっていうふうに、ポスト真実っていう言い方で言っているんですけども、確かに、他人の意見やマスコミの情報を自分で分析して何が本当なのかを真実なのかっていうことを理解するっていうことはますます今の社会の中では難しくなっていますね。ただひとつ言えることは、ひとつの情報源だけをうのみにしない、いくつかの情報源を比較するということがこういう時代になると重要なことだと思います。しかも、メディアはいま、新聞、雑誌、テレビのみならず SNS とか、情報源が山ほどあるので、目移りがしてしまうんですが、ひとつの情報源だけに頼らずに、それを比較してみる。その上で、比較すれば当然矛盾するところとか、重なりあうところとかがでてくるでしょうから、そこからそれを手がかりにして何が真実なのかを見極めていくっていうふうな、これは自分でやる他ないですし、マスコミ自体の中にそういう動きも出てきていますので、少し自分でも探してみるということが重要なことだと思います。

それから「趣味で俳句をしているが、俳句を決まりの中で自分が思ったこと、感じたことを表現することは自分を見つけるひとつかなと思っている。」これは大変いいことですね。僕も俳句を趣味にしているんですけども、これ質問されたかたどなたかいらっしゃる？もう帰られたかな？俳句作っている方どのくらいいらっしゃる？ここにはいない。俳句っていうのは十七文字、じゃあプレバトっていうのを見たことがある人いる？僕は毎週欠かさず見ているんですけども、俳句は有季定型っていう、有季っていうのは季語ですね、季節の言葉、歳時記に載っていますが。定型っていうのは五七五、だからあるいみ枠組みが決まっている文芸なわけですけども、「俳句の決めりの中で自分の思ったこと感じたことを表現することは、自分を見つけることの一つ」と書いてあるんですけども、さっき自己表現とでましたし、これから話題になるアートも自己表現のひとつですけども、なんでも好きにかきなさい、表現しなさいと言われても困るわけですね。

だから、ある程度の型っていうものがあつたほうが、最初の出発点としてはとっつきやすいというか、手が

かりになりやすい、そういう意味では俳句なんかはこういう有季定型という枠があるので、かえって自己表現がやりやすいっていうか、それだけ難しい面もあるわけですが、後でまた話題になるかもしれませんが、型ってというのは、プラスの面とマイナスの面があって、型には江戸時代の石川丈山（いしかわじょうざん）という茶人の言葉だったんだと思うんですけども、守破離って言葉があります。

生け花でも俳句でも何でもいいんですが、あるいはアートにもあるかもしれませんが、最初は型を覚えるっていうか、相撲でもそうですね、右四つとか、左四つとか、型を守る、だからこれは修業時代というか、お師匠さんについて学ぶ、そういう段階ですね。まあ絵画でも色使いとか、クロッキーの仕方とか既存の型を学んでいるのが“守”。これは必要な訓練、何事をやるにしても、そういう、囲碁や将棋の、今有名になった藤井聡太、何段ぐらいになったのかな、彼は、七段？彼も最初は飛車の動かし方など、定石を身につけたんですね。囲碁にも将棋にも定石はありますけれども。ところが定石を守っていただけでは強くないわけですね。

“破”ってというのは既存のルールを破る、新しい手をクリエイションする、そういう段階ですね。その意味ではある意味で自分の先生、お師匠さんと対立することもあるし、むしろ自分の先生を乗り越えようとするのが“破”ですね。既存の伝統とかそういったものをむしろ否定する。それが“破”の段階です。そこで新たなクリエイションということが起こるんですが、それでも既存の型を破ろうというか、あるいは先生を乗り越えようというか、そういう思いだけが強くなるとかえって、さっきの自己表現ではなく自己主張になってしまってるさい、というか、あまり他人に訴えないということになるわけですね。だから、そういう自己主張をあまりしすぎると今度は逆に他人から反発をくうし、他人の心には訴えないということに。

最後の“離”というのは、そういう対立とか、定型を離れて、自分なりの型というか、自分なりの表現を獲得するような段階。ここになるともう他人を乗り越えようとか、伝統を打ち破ろうとかそういう、あるいはみ小賢しい自己主張はなくなって、なんか『論語』にありましたね、自分の思うままにふるまって、しかものりをこえず、あれは最後の段階でしたっけ？なかなかそこまではいきませんが。

そういう“守破離”っていうふうな段階がありますけれども、たぶん自己表現の活動っていうこともそういうプロセスと密接に関わりがあるのではないかと思います。

それから、「本業とは別に表現者としてこの10年ほど活動しています。学生時代に学んだことの専門性が自己の表現について生きてくると実感しているところですが、このようなことについて何かまつわる思われることがあればお話を聞かせて下さい。」とあります。前にもうひとつ質問があって、「パラダイム論について学生時代に学んでみたいと思っていましたが、理学部だったためその機会を逃してしまいました。この機会に先生の研究についてわかりやすく解説いただけますと嬉しいです。」という、パラダイム論について、ただ、解説すると1時間ぐらいすぐたってしまうので、まああと時間があつたらしますが、「理学部だったためその機会を逃してしまいました」ということですが、私ももともと理学部でして、理学部で物理学をやってまして、それから哲学に変わりました。

それで、さっきの元の質問の方、「学生時代に学んだことの専門性が自己の表現に生きてくるのはどういう場合か」僕は物理学から哲学に変わったので、物理学をやったことは無駄になったんじゃないですかとか、無駄ではありませんでしたかとまあ、それでだけ遠回りというか年数をくいましたんで、そういうことを聞かれることがあるんですが、僕は物理学をやったことが今の哲学をやっていることに関係ないとも思わないし、む

しろこの方の表現を使えば自己の表現に生きてくるというか、そういう場面の方がむしろ多かったと、特に哲学という学問はいろんな学問分野と境を接しているので、個別の学問というか、物理学なら物理学をやったことはいろんな意味で哲学をやる上では、刺激になった、今でもなっているというふうに思います。

だから、専門性と自己表現というのは必ずしも矛盾するわけではなくて、逆に専門性をつきつめることによって、もうちょっと展望がきく、広場にでることができるといえることがありうるだろうと思います。ただそれには、専門を勉強しているときにもやはりたえず周りのいろんなことがらに目配りを良くしておくということが大事かなと僕自身は考えています。

それからせっかくですので、パラダイム論というのにひとことだけ答えておくと、これは科学理論の発展というか、科学の歴史についての議論で、トマス・クーンというアメリカの科学史家が唱えた説ですけれども、今まで科学というのは右肩上がりに発展する、進歩するものと考えられていたんですね。古代のアキメデスやユークリッドあたりから始まって、ガリレオやニュートンを経て、アインシュタイン、最近の小柴先生とかですね、吉野先生とかそういうところまで右肩上がりに進歩していくのがだいたい科学のイメージだと思います。それに対して、芸術とか文学ですね、例えばミケランジェロやレオナルド・ダ・ヴィンチよりも、ピカソの方が偉いかというと、決してそうは言えませんね。芸術とは進歩と言うことはありうるんですか？芸術の場合には時代が移るにつれてデッサン力が落ちるとかありうるのかもしれませんが、科学の場合には、科学というのは基本的にはデータですから、データが精密になればそれだけ新しい発見も可能になるわけで、新しい理論もでてくるというわけで、当然ニュートンよりはアインシュタインの方が、偉いかどうかは別として、少なくとも理論的なパースペクティブは広がっているわけです。

ただ、クーンが唱えたのは、進歩にも右肩上がりに連続的に進歩していくわけではないと、いわば、階段を上がるように、さっきルールという話をしましたが、研究のルールっていうものがあって、それがあつた時代に来るとぴょんと跳ね上がる。そしてしばらくその時代が続く、また別のルールができあがってまたしばらくして、ある時代を支配するものの見方、考え方をパラダイムといいます。それで、このぴょんと上がりますね。これを例えば、天動説から地動説へ、ニュートン力学からアインシュタインの相対性理論へ、ある意味でぴょんと飛躍するわけですね。その飛躍は連続的ではなくて、断続的という言葉を使います。その飛躍した時期を科学革命と呼んでいるわけです。だから、科学の発展というのは連続的な進歩であるよりは、パラダイム転換を、最近ではパラダイム転換というのが日常語として通用しているようですが、パラダイム転換を通じた断続的な発展、それが科学の歴史だというのが、クーンの唱えたパラダイム論といわれる考え方です。また後で質問があればお答えしますが、いまのところはそのぐらいで勘弁をしてください。

次は「今は行かなくてもネットなどでいろいろ見れます。実際にギャラリーや美術館などに足をこぶということは、何を意味するのでしょうか？」うん、これもそうですね。今はいろんなメディアで、または画集なんかでも精密な複製ができるようになっていきますので、ギャラリーとか美術館に足を運ぶというのは、最後は本物というか、よく骨董家さんの修行では最初に一流のもの、つまり本物を飽きるほど見せるといいますね。そうすると自然と本物とまあ偽物とは言わないまでも二流のものというか、それと区別する目が養われる。それがはじめから、本物も二流も一緒くたに見ていると、そういう目は残念ながら養われないというか、だから骨董屋さんの修行では最初は徹底的に本物だけをみせる。それで目を養うということを知っています

けれども。

やはりギャラリーや美術館で実際にそういうものを見るということは、単なる画像として見たりですね、そういったものとは違うテクスチャーとか、質感とかそういったものを見るという訓練にはなるのではないかと思います。ただ、ドイツの哲学者でヴァルター・ベンヤミンという人がいます。ユダヤ人だったので、ナチ스에追われて、スペインのポル・ボーという港町で自殺をするんですけども、今そこにベンヤミンの追悼の記念碑が海に面した崖のところに、海を見下ろすような彫刻というか建築物が建っています。それを設計したのが、ダニ・カラヴァンという国際的に有名な彫刻家です。ダニ・カラヴァンの彫刻見たことある人います？どこで見ました？そうですね。今、宮城県美術館の入り口のところに、白い柱が何本ぐらいですか 10 本ぐらいあるかな？下を小さなキャナルとか川みたいなのが流れていますね。あれが、ダニ・カラヴァンが設計した彫刻です。だから、宮城県美術館も、そういう意味では、ベンヤミンの追悼碑と同じ作者が作っているということになるのですが、そのベンヤミンが、ちょっとタイトルこれで良かったかな？『複製技術時代の芸術』っていうそんな長くない論文を書いています。これは非常に有名な論文なので、これの解説をしたのが、岩波現代文庫かな？に入っていますし、『複製技術時代の芸術』っていう論文は芸術論としても非常に有名な論文なので、その中で、ベンヤミンは、「アウラの喪失」と「展示価値」ということをキーワードにして、アウラってというのは、皆さんよくオーラって使います、あの俳優にはオーラがあるとか言いますよね。そのオーラをドイツ語でアウラっていうんですけども、昔は芸術作品というのは当然ながら一点しかありません。例えばダ・ヴィンチのモナリザが何点もあっても、でも 2 点ぐらいあるんでしたっけ？何点もあつたら価値がなくなりますね。そこが科学と芸術の違いで、科学は再現実験というのができないと、STAP 細胞と同じで意味がないんですね。自然科学は反復されること、再現されることが一番価値があることです。それがないと科学とは認められません。ただ芸術は再現される、モナリザが誰にでも再現できたらルーヴルに飾っておく意味がありませんね。だから、再現ができないということが芸術の、それがオーラです。アウラ。なぜ芸術作品がオーラを持っているかという、それが誰にも真似できない、複製ができないからです。

しかしベンヤミンによれば、写真とか、映画とか、そういう 20 世紀になってからでてきた作品、芸術のメディアというのは、写真というのはある意味で最近誰でもスマホで撮れるようになってはいますが、ある風景があったときには、もちろんプロのカメラマンが撮ったのと、僕らのような素人が撮ったものとは違いがあると思いますが、基本的には同じ風景が撮れるわけですね。だから、“一回性”、オーラってというのは、一回性、一回しかない、だから価値があったわけで、だからそれを美術館のような建物に展示する価値もでてきたわけです。ところが、写真とか映像とかですね、そういうのが美術の重要な手段になってくると、次第にオーラというのが作品から失われていった、あるいはプリント、版画もそうですね。版画は、一つの版木から浮世絵なんかもそうですが、何点も複製ができますね。そうすると今度一回性が持っていたオーラが失われるということになるわけです。

しかし、にもかかわらず、それじゃあ複製技術、写真とか映画とかですね、映画は当然複製される、東京でやっている映画が仙台でも見れるわけだから、当然フィルムは複製して別に写真でもオリジナルのプリントって言うのはある程度価値がありますね、ただ、複製だからってそれほど本物と偽物の違いというわけではありません。だからそういう複製技術の時代に芸術作品が持っている価値って言うのはいかなるものかというのを論じたのがベンヤミンの論文ということになります。

ベンヤミンはむしろそういう新しい時代、複製技術の時代の芸術のあり方というものを肯定する、いうふうな議論をこの中でたてています。だから、基本的にはギャラリーや美術館には足を運んでいただきたいのですが、それはやっぱり本物を見るということによって培われる眼っていうか、ただ、現代は写真だって映画だって芸術ですから、そういうのにはまた、一回性、オーラを持った作品とは別の価値基準というか、価値がでてきている。最近では例えば美術館で映像作品やインスタレーションを展示するというのも当然でてきていますから、そういう意味ではまた別の一回性のオーラとは違った価値っていうものを我々は見出していかなければならないのだらうと思いますけれども。そういうことをこの質問から連想したということです。

それから「制作活動をする際、最終目標はなにか、決めていますか？それとも好きなものを描いたり作ったりのそれ自体が目標となっていますか？見る人に伝えたい何かなどはありますか？」これは佐立さんに一言言ってもらった方がいいんじゃないかな、実際に制作をしている。

佐立・・・私は人それぞれと思うんですけども、逆にその野家さんが本を書かれる際にこれがあてはまるんじゃないかなと思って。好きなものを書いたり作ったりというわけではないと思うんですけども、それで、自分の本を書かれる際の話聞いてみたいと思います。

野家・・・はい、逆につっこまれましたけれども。本を書くというのは当然制作活動には入りますけれども。美術と違って例えば水彩画、油絵、彫刻、そういう、本を書くのはもう手書きかワープロを打つかどちらかしかないんですけども、あまり手段を選ぶということは出来ないんですけども。まあもちろん、本を書くのの一つは学会で認められたいとかそういう少し名誉欲みたいなものも当然ありますけれど、それでやはり、それだけだと、10部も売れないでしょうから、ある程度本屋さんに並べてもらうためにはやはり一般の人にも読めるような、哲学はともかく一般に難しいっていうか、読めないっていうか、買わないっていうか。だからせいぜい僕らの業界ではだいたい初版が1500部ぐらいかな、他の何万部というベストセラーとは二桁も違うぐらいの部数しかでませんけれども、僕の高校時代の友達がどこかの本屋で僕の本を見つけたって連絡よこしたんです。奥付っていうのを見たら、まだ初版だったって。しかも5年前に出た本だったっていうので、哲学の本とはこんなに売れないものかというふうにびっくりしてわたしに連絡をしてきたということがありましたけれども。

基本的にはもちろんここにある好きなものを描いたり作ったり、それ自体が目標となっていますかと、ある意味ではそうです。もちろん他の人に、なるべく広い人に読んでもらえればありがたいなとは思っていますけれども、読んでもらうために議論の水準を下げたりということはあまりしたくないので、できるだけわかりやすい言葉で書くことには努力はしていますけれども。だからといって、ポピュライズというか、あまり自分の言いたいことを曲げてまでもはやされることを目標にはしていないというぐらいでしょうかね。芸術の場合もそれと同じようなことが、まあそこに佐立さんの作品がありますけれども、自分が表現したいこととそれから人に理解して受け入れてもらうという間にはギャップがあると思うんですね。それが一致すればそれに越したことはないんでしょうけれども、よくいわれることですけれども、ヴァン・ゴッホは生きている間には一点ぐらいですか、売れたのは弟の画廊で人が買ってくれたのは一点ぐらい、今は何十億としていますね。です

からやっぱりその時代の許容度と、自分の表現の力、それがうまく一致すれば芸術家として幸せな一生を送れるのかも知れませんが、まあそのためにたぶんゴッホも筆を曲げるということはしなかったと思います。だからその辺は難しいというか、個人の目標とするところもありますでしょうし、才能もあるだろうし、時代の雰囲気や許容度もあると思いますが。

参加者…さきほどのクーンのパラダイム論の話をつつてですね、芸術的パラダイムなんてそういう言葉は使えますでしょうか？

野家…うーん、いい質問ですね。たぶんぴったりこれと重なり合いはしないでしょうけれども、ある種の時代の、時代を形作った芸術の潮流というのはあると思いますね。だから、良く印象派なんて名前がついていますね。それとあと、昔は神話とか、西洋ではそういったものに仮託してしか例えば女性の裸体というかヌードって描けませんでしたけれども、近代になるとそれがおおびらに、マネの“草上の昼食”でしたかね、ああいったのにみられるように普通に女性の裸体を表現できるようになったと。時代時代の基準っていうのはあると思いますし、美術の方にもキュビズムの時代だとか、シュルレアリスムの時代とかいろいろあるわけですから、その意味では広い意味でパラダイムっていう、その時代を主にリードした芸術潮流という意味で使うのであれば出来るだろうと思います。他はいいでしょうか？

そうすると、あとこれも難しいな。「場所」っていう、これも今日も場所っていう言葉ありましたね。仙台の表現の場を哲学する、という“場”ということや“場所”ということ、これは哲学的にも非常に重要な概念です。「場所は美術家の作品展開とわかちがたい関係であると思いますが、ご見解をお願いします。」と。場所とか場というのは 20 世紀になってから非常に注目されるようになってきた、哲学でも、概念です。特に日本の哲学の出発点を形作った、西田幾多郎が“場所の論理”という有名な議論がありますけれども、ヨーロッパの哲学思想の個とか個人、個体ですね、個人とか個体そういったものと対立するものとして、場所とか場というものがむしろ東洋的な考え方として強調された時代もあります。ただ、物理学の方でも、20 世紀は原子論、原子や分子、あるいは素粒子の時代であったわけですが、場、フィールド、重力場、電磁場、そういう方へとシフトしてきたのが 20 世紀の物理学です。その意味では、場所とか場という考え方は必ずしも、西田哲学とか、東洋に特有の考え方ではなくて、現代物理学の最先端のところの問題になっている概念だということができます。

ただ、それだけでは、おさまらないので、「美術家の作品展開とわかちがたい関係にある」というのはその通りで、それはなぜかという、場所っていうのは、よく出会いの場というふうな言い方がされますけれども、出会いを可能にする条件というそういうのが場、とか場所であると思います。だから、単なる空間ではない。どういったらいいのか、空間というのは space(スペース)、場っていうのは今書きましたように field (フィールド)、あともっと遡りますとアリストテレスの自然学にまでいくんですけども、「トポス」という言葉があります。トポスっていうのは、今でもニュースなんかで topic (トピック) っていう言葉が使われる。あるいは topics(トピックス)、今週のトピックスなんていいますね。あれの元の言葉です。それがトポスなんですけれども、トポスというのは、空間ではないです。空間というと我々はだいたい容れ物、容器、つまり空虚なひらきかたを思い浮かべますね。つまり、例えばこの部屋に、机があったり、椅子があったり人がいたりするわけ

です。なんかの容れ物。それに対して場とか場所と言われた場合には、そこにある物と物との関係が場所を形作る。ですから、単なる容れ物ではないんですね。すでに机とか椅子とか、人がそこにあって、その関係があるこのトークという場所、場を形作ると意味では、単なる容れ物ではなくて、そこには物と物との関係、物と人との関係、人と人との関係そういった関係のいわば結節点というか、結びつきというものが場とか場所のいわば特徴ということができるだろうと思います。そしてそれは当然、物と物、物と人との関係ですから、我々の記憶に残ります。だから、なんか我々思い出すときに例えば出来事を思い出します。そのときにやっぱり出来事が起こった場所というものを同時に我々思い出すわけです。ですから、場所から切り離された出来事だけを思い出するのはむしろ難しいというか、むしろ出来事っていうのは場所と一体化して、さっき我々の一番古い記憶は二歳か三歳ぐらいのところでなかったかというふうに言いますが、そのときの記憶っていうのはたぶんある出来事っていうのは、場所と共に思い出されるっていうのが普通ではないかと思います。

僕の一番古い記憶っていうのは、ひいおばあちゃんの背中におんぶして近くの東北線の鉄道で汽車、そのころは煙をはいていましたが、それを見た、たぶん夕方だったと思いますが、そういうその線路とか場所とかと一緒にそういうのが蘇ってくるわけですね。だから、空間っていうのはそういうものから切り離された抽象的な容れ物ですね。それに対して場所っていうのは我々の経験とか、記憶と密接に結びついたものです。その意味でやはり、この質問にあるように美術家の作品の展開っていうものに空間はあまり、関係するかも知れませんが、空間よりやはり場所っていうものが密接に関係している、そういう、その意味でも場所っていうのは、人と人との出会いだけでなく、人と物との出会い、あるいは我々の過去との出会い、そういったものを可能にするのが場所だっていうふうにいえるのではないかと思います。

あの途中で構いませんので質問あったらどんどんさっきと同じようにだしてください。

それから、さっき言ったもう少し具体的なものには入りますが、「仙台が画廊がとても少ないと思います」僕もそう思うんですが、ここも前は画廊だったんですね。（*「ここ（スペース B 奥のスペース）で続けたいらっしゃいます。」）「ずっと仙台で暮らしています。ギャラリーで働いていますが、作品を見る、作品を買う、飾ることが限られた人達にしか定着していないように思います。」そうですね。「ギャラリーは敷居が高いのか。」うーん、少し高いようにも感じられますが。「作品を家に飾るといふ豊かさは定着しないのか」そうですね。ただ、テレビのなんでも鑑定団なんてみるとなんか物置を探すといういろいろ出てくるようですが、「仙台以外ではどうなのか。」ということですが。うーん、どうでしょうね。僕は名古屋に 5 年間住んでいたことがありますけれども、僕の知っている人の家では、絵を 1 ヶ月にいっぺんずつ複製ですが貸してくれるんですね、それを毎月玄関の所に変えては新しい絵を飾ってましたんで、それを観に行くのが楽しみだったことがありますけれども。仙台はどうなのかな、皆さんの家はどうですか？ここに来られる方はそういう趣味をお持ちの方が多いと思いますけれども、まあ普通はカレンダーはどこの家にも飾っていますね。カレンダーを選ぶときに、風景を選ぶか、あるいは絵のあれを選ぶか、そういうあたり趣味の違いがでてくるのかもしれませんが。ただ、作品を買う、飾るといふことがあんまり一般化は残念ながらしてないと思いますね。これはむしろ皆さんに伺った方がいいのかな？

参加者・・・哲学から見たですね、哲学っていうのはわたし全く勉強していない分野なんですけれども、いわゆ

る人が豊かに生きていく、それをある意味では準備表明いただいているのではないかと、そのときに、画廊っていうのはそのひとつの自己表現なり、自己表現の確認っていうんですか、そういう場でもあるだろうと思って。そういうことから考えたときに、先生がこの仙台にあって、そういうものの発展というんですか、拡大っていうんですか、人の感動の中への参画っていうのを何かお考えであれば、ぜひ伺いできたらなと思うのですが。

野家…うん、そうですね、ただみんなに絵を買えとはいえませんが、やっぱり我々の生活っていうのはなんかしら、特に現代はあわただしいですよ。時間に追われて。そういうときになんかエアポケットみたいな、それこそ空間というか場所というか、あるいは立ち止まって考えるような時間というか、そういったものがどっかに僕は必要だと思っているんですね。あるいはなんでしょうね、こういう日常とは違った空間に身を置くっていうか、そういうことができるのが、美術館とか、博物館とか、そういう公共施設だというふうに僕は思っているんです。だから美術館に入って絵を見るということは、単に高級な美術鑑賞というよりは、今までの日常的な生活から、ちょっと別の、異次元とはいわないまでも、少なくとも絵を見ている間はあまり借金のこととか頭に思い浮かばないでしょうから、そういう日常生活からちょっと離れてものをみたり考えたりする空間というかそれは、むしろ現代人というか、時間に追われて一分一秒をあらそうような生活の中できわめて、さっきの自己実現とかあるいは自分というものをもういっぺん振り返るみるために、大変重要なことではないかと思っています。

それは美術館だけではなく、博物館というのはある意味では、考古学のあれとか並んだり、江戸時代のあれが、つまり自分と離れた過去の時代にそういった意味では戻ることが出来る、あるいは別な時代の人達がどういった生活をしていたか、ものの見方考え方をしていたか、だから今いる自分をちょっとずらしてみるといいうか、そのことによって現在の自分をもういっぺん振り返ってみるといいうか、そういうことが出来るのが、そういう美術をみたり、あるいは遺物をみたりですね、あるいは先ほどの、それを自宅でやるときもたぶん買った絵をどこに飾っておくかというかなり皆さんいろいろ思いを巡らすと思うんですけども、あまり台所に飾る人はいないですね。トイレに飾る人はいるかな。だからやっぱりそういう家の中でも普通の空間とはちょっと違った、まあ玄関でもいいんですけども、自分をちょっとずらしたところに置けるようなところに絵を飾ったり、書を飾ったり、そういうのは、今現在いる自分ってものをちょっとずらしてみるっていうか、別の所においてみるっていうか、そういう効果が。

だからそういった意味では絵っていうのはいわば、窓っていうのは外をみる、外界をみるわけですね、だから絵っていうのは外じゃないけれども、絵を通じて自分の内面をもういっぺん見るというか、だから窓が外を見るんだとすると、絵とか書というのは自分の内側をみる、そういう窓なのではないかと、そんな気がしています。

参加者…そうしたときにですね、別な空間だというような考え方、そういう見方がちょっと私違和感が覚えるんですね。先生が具体的におっしゃられた家の中に絵を飾るっていうのは、別の空間ではないわけですよ。生活の中の空間。ですから、そういうこう見方っていうのが、いわゆる自分を自己表現をする上において、具体的に生活の中で対象物としてそれを認めていくという、それにものすごく影響を本来ならばあっていいと思

うんですね。ですから美術館が別の空間だって思うっていうのがなんかちょっと違うんじゃないかなって。

野家…かえって敷居をたかくしているっていう？

参加者…ええ。それがどうしてなのかっていうのが私わからないから。先生にお伺いしながら……。

野家…もちろん、今言われたお考えは大変重要な事だと思います。ひとつは、それは昔でいうと民藝運動、柳宗悦っていう有名な、民藝運動をはじめた美術家ですけども、彼はいまちょうと言われた芸術とか美術っていうのは、そんな異空間にあるものではなく、まさに日常、ちゃぶ台の上にあるはずだっていうか、あるべきだという考え方です。だから、茶碗とか器ですね、お椀とか、箸とかそういった中にまさに美を見出す。そういうことをはじめたのが、柳宗悦だったと思います。

それはひとつの重要な視点だし、そういった意味で日常茶飯の中に美を見出す、大変重要な事だと思います。ただ、それと、たぶん美という基準に照らせば同じだと思うんですけども、ダ・ヴィンチやゴッホの絵画という物がやっぱりちょっと家庭に飾るには高すぎますね。だからそういうの、公共の建物、美術館なり博物館なりそういう中で見られる、そしてちょっとやはり日常のちゃぶ台の上の茶碗の美とまた別の次元の美というかそういうのがあっていいと思うんですね。

今言われた、ぼくはずっと抜けていましたけれども、日常のこういう生活の中、たとえばこういうコップひとつにも、美を見出すというか、それは非常に大事だし、われわれの美的センスなり感覚を磨く重要な事だと思っています。それと、一方にはわれわれは家庭の中に持ち込めない美術品という物があるわけですよ。そういうのはやっぱり公共の中でそのときはちょっと日常生活から離れた鑑賞の仕方をするともあ、僕は両方あっても良いのではと思って、大変良い指摘をいただいたと、ありがとうございます。

他何かありましたら、何でも構いません。

参加者…わたしの友達がですね、河北展に入選しましたって言って観に行ってくれと言われたんで観に行ったんですけども、その中にですね、ずっとこの絵は何の絵なんだろうって、何を描いたんだろうってわかんない抽象的な絵が、そこにタイトルが下にかいてあって。そしたらそのタイトルを読んだら、頭の中でパンとはじけたような気がしましてね。おおなるほど、そういうことかと。そのときにはあきらかに美術的が概念が反転したような感じを受けたんですね。ですから、こういう絵の描き方っていうのがあるんだな、とはじめてそこで気づかされたときには、なんかカルチャーショックみたいなのがおきましたですね。そういうのが外に行ってみる絵っていうのでしょうかね。

野家…そうですね……、そのタイトルはなんという。

参加者…えーとですね、原発の絵なんです。それはもう非常に抽象的な表現で描いてあったんですね。それで何描いてあるかさっぱり分からなかったんですけども。そのタイトルみたら……。

野家・・・納得いったと。佐立さんのあの絵はなんていうタイトル？

佐立・・・あれは“知覚の闘”です。

野家・・・難しいタイトルですね。そういわれているとなるほど。うん、そうですね。タイトルっていうのは芸術品にとって重要かもしれませんね。ただ、よく無題っていうのがありますね。アンタイトルド。あれはどう理解したらいいのかあれですけども・・・。

参加者・・・時間がもうあまりないようですけれども、出来れば、今日チラシいただいた来週の大学のシンポジウム興味あるんですが、行けなくて、時間がちょっととれなくて残念なんです、先生のお話も入ってらっしゃるようなので、今回の県の美術館問題のことで可能な限りこの場においていただいている方にも、お話をお聞かせいただくことはできますか？

野家・・・はい、そうですね。そろそろ時間も限られていますし、あと、一番最初に美術館の方の問題に質問をいただきましたので、今回そこにチラシがありますけれども、来週の土曜日、一週間後ですね、川内キャンパスの文系総合棟そこで、この前宮城県知事に何人か集まって要望書を出したんで、そのときの発起人のメンバーが中心となって少しずつ20～30分ずつ時間をいただいて話をさせていただくことになっています。

で、一番最初に僕は“公共性の危機と批判的討議”とまだ何をしゃべったらいいかわかってないんですけども、今回の美術館問題っていうのはもちろんまちづくりとかそっちのほうに大いに関係があるんですけども、ひとつはやっぱりさっきからでてるけれども美術館というのは、博物館もそうですが、公共建築物というか、公共の場、なんですね。公共ということをどう考えるかっていうことが、ひとつのポイントになると我々考えているものですから。

それで、“公共性と美術館の未来”というタイトルをつけさせていただきました。それで、公共ということは哲学や思想の分野で大変ひとつのテーマになっていまして、これは去年の3月に出た、『思想』という雑誌、哲学の雑誌なんです、これ公共という特集をやってまして、これに僕も論文を書いているんですけども、公共っていう概念が日本とヨーロッパなんかではかなり違った意味に使われているところがあって、ひとつはですね、カントという大哲学者がいるんですが、カントに『啓蒙とは何か』という短い論文があります。その中で公共の中で論じている。普通は我々日本人の感覚だと、公共はもちろんパブリックですから、“プライベート”“わたくし”、“私的”ということと対立をします。公共というと我々は公共の福祉とかですね、そういうことをすぐに頭に思い浮かべて、“おおやけ”、しかも“おかみ”、っていうふうな、つまり政府とか議会とか、行政機関とかっていうのが公共で、それから、家庭とか個人とかそういったものは“わたくし”、プライベートだと、普通そういうふう理解しているんですけども、カントは違うっていうんですね。

公共っていうことは、自立した個人に、先ほど自己主張っていうのがでましたが、自立した個人が何のものにもとらわれないで、自分の意見を述べるって事が“公共”ってことで、それに対して役割、つまり知事であるとか、市長であるとか、教授であるとか、そういう役割に従って発言することはこれは私的なことだと、日本人の公と私の考え方からするとまさに逆のことを言っているんですね。それで僕は前ショックを受けたことが

あって、そういうことから、もういっぺん公共、日本人だとどうしても例えばダムを作るので、村がつぶされるっていうときに、公共の福祉のためだから我慢しなさいということを昔は言われたと思いますが、カントの考えはそれとは逆で、そういう役柄、役割、公務員であるとかですね、教師であるとか、あるいは議員であるとか、そういう役割によって発言するのはこれは私的なことだと、そうではなくて、そういう役柄とかなんとかから全く解き放たれて自由な個人として発言する、そのときには、そこに書きましたが“批判的討議”、っていうことが一番大事なことですね。

高校で最近“公共”で科目が新しく設置されたんですが、私は自分で調べたことはないですが、学術会議でちょっと哲学教育の分科会があって、私の友人が、すべての公共の教科書を調べたところ、“批判”っていう言葉が一カ所も出てこない、その高校の公共の教科書に、つまり、公共と批判っていうのは対立するものと思われている。ところが、批判っていうのは、英語では *critic* (クリック) 独語では *kritik* (クリティーク) ですが、日本語では批判というとこれは、他人を非難するっていう意味とほとんど同じに受け止められているところがあるんです。批判っていうのは悪いこと、他人を悪く言うこととどうも日本人は受け止めているんですね。ところが、批判と非難は全く違うことで、カントの一番有名な著作は『純粋理性批判』っていう、カントの哲学は批判哲学と言われています。そうするとカントは他人を批判ばかりしているけしからん哲学者だということになるわけですが、批判っていうのはもともと真剣に検討するとか、吟味するということです。学生も批判というと、やっぱり他人を非難することでやってはいけないことと思っているんですが、もともと批判というのは、真剣に検討吟味する、だからカントは『純粋理性批判』という本を書いたし、その他にも『実践理性批判』とか『判断力批判』とか、批判という言葉 키워ドにして、批判哲学という分野をきりひらいたんですけれども。日本では、公共と批判というのが対立と考えられていて、批判をすることは悪いことだ、それは公共に反するというとんでもない理解がまかりとおっている。

で、むしろ公共っていうことを形作っているのは、批判的な議論、さっきカントが言ったようにですね、批判的な議論こそ、“公共圏”という *public sphere*(パブリック・スフェール)、もともと公共っていうのは、ヨーロッパでは近代に出てきたコーヒーハウスですね、ドイツやフランスやイギリスで、最初はイギリスかな、今でいう、喫茶店やカフェ、喫茶店に人が集まってわいわいがやがや今の君主はとんでもないやつだとか、そういうことを議論しあったのが公共圏なんですね。ところが日本ではどうも公共と批判が対立するものとして受け止められているけれども、もともとは批判的議論をする場が“公共圏”、だから、人々が言いたいことを言い合って、それでそこから暴力を伴わない、合意形成が生まれていくというのが近代のひとつの特徴とされているわけですが、どうも日本では残念ながら、公共と批判というものが切り離されて別物だと思われている。その点からは、新しい高校の科目の公共と題された教科書に批判ということがひとこともでてこないというのは、まさに、公共ということをはき違えているとしか、文科省はですね、そういうことを最初に言って、公共建築物である美術館や博物館のあり方というものも、批判的な議論の上で方向づけが決められるべきだというのが、今回私が最初に言おうとしている、これを今言ってしまったので、来週の私の話は聞くことはありません。そんなことでよろしいでしょうか。

参加者…すみません、いいですか。今の話を聞くと、ネットでなんかいろいろ言い合う、あれはもう完全に公共性があるんですか？

野家・・・うーん、やっぱりその前に、きちっと公共っていうのは、自分の名前をあかして。

参加者・・・匿名はゆるされない。

野家・・・ええ、そうです。そしてその発言に責任を持つっていうことが大前提になって。

参加者・・・自由に発言するために、匿名性は必要だって、僕は思うんですけども。そうでないと、あいつらあんなことって、名前実名あげてやっちゃうと、炎上とか、やられるっていうのがあって、匿名ですら危なっかしいと思うんで、僕は自由を担保するためには匿名性が必要で、少なくとも言葉使いはひどいんですけど、っていう話ですけども。非暴力は担保されていますよね、ネット空間では。言葉の世界で。あれはあれで下品ちゃ下品かもしれないけれどもある種の公共性があるのかなって思ったんですけども。

野家・・・うん、そうですね。僕もネットに全く公共性がないとは言いません。ただ、もともとの出発点からコーヒーハウスで、フェイストゥフェイスで議論し合うっていうのが出発点でしたので、それからすると、やっぱり今のネット空間と言うのは、わずかではあるが公共性をもっていると僕も思います。ただ、匿名で他人を批判じゃなくて、非難ですね、それは公共性には反すると僕は考えているので、だから、ネット空間や SNS にも半分のメリットと半分のデメリットと、ただ、今のネット空間には非難の方が炎上したりですね、そっちのほうにいつっちゃうと、公共とはまた別のものになっちゃうというふうに考えています。

参加者・・・その辺の線引きって言うのは、要するに人格否定とかそういうはなし。

野家・・・その辺は難しいですね。これだけネット空間がひろがっちゃうと、明確な線引きをするというのは難しいと想います。残念ながら、というべきか。ただ、他人に対する非難の方は、プロバイダーに削除する権限をあたえとか、いろいろそういう意味での、なるべくネット空間を公共圏に近づける努力っていうのはされていると思うんですけども、まだまだ不十分だろうとおもいますね。

そろそろ時間ですが、もし他にありましたらどうぞ。

参加者・・・意見としてなんですけれども、美術館問題に関して強い関心を抱いていまして、一番悲しい思いをした一言がありまして、知事の記者会見の中でですね、そっちの意見も求められれば持ちたいと思うみたいなことを言ってたんですけども、そっちって、一緒じゃないのかと思いましたですね。県民会館、県美術館を巡る問題ってたくさん問題性があるって、もう本当にすごいヒエラルキーっていうか、ものすごいレイヤーがあって、どっからかみついていこうかという材料が山ほどあるんですけども、かみつく以前に悲しい思いをしてですね、知事ご自身が、ただ別に知事をやりこめようという話ではなくてですね、まさに公共というものを理解されていない政治のお立場だとするととても困る、これは県美術館問題で一番大きい問題ではないかと

私は思ってしまったですね。その辺なんか、お伺いしたいところです。

野家…ありがとうございます。それは全く僕も同感です。やっぱり政治で一番良くないのは、そっちとこっちっていうふうに、バリアーをたてて分けちゃうことですよね。それが一番得意なのはトランプ大統領ですけども、とにかくまずは、そっちとこっちではなくて共通の広場っていうか原っぱで、率直にお互いに批判し合うことが重要な事で、最初からそっちって言っちゃったら、議論も批判も何も成り立たない。そういう意味では、全く同感です。

参加者…その言葉を聞いたところから、美術館問題は場所の問題ではないっていう概念もってしまいました。ありがとうございます。

佐立…まだ質問はあると思うんですけども、時間になりましたので、このトークは締めたいと思います。そして、ここから、この場をコーヒーハウスにしてはどうかと思いますので、興味ある方は、コーヒーハウスに残って野家さんとお話をされたらいかがでしょうか。それでは、野家さんに拍手をお願い致します。今日はありがとうございました。